

# 京鹿子

昭和三年八月一日發行  
通卷一六四号(每月一回一日發行)

8月号

鈴鹿 呂仁  
拾掬集 その七十一



夜雨抱く夢を枕に雨蛙  
枝蛙葉陰に残す真の色  
朱を解くサルビア言ひ訳ひとつ  
サルビアに昨日の嘘を見透かされ  
洗脳の子鹿カメラに瞳めのうるむ  
尺蠖の五欲を計る術もたず

夏野へと白き線路の走る朝  
振花や振り子のやうに戻る夜  
うす紅にペディキュア跳ねず初浴衣

吟行永観堂界限

初蟬の念仏ひとつ浄土門  
青梅雨の遍く照らす吾と人  
念ずれば蝸牛の遅れ永観堂  
哲人の翳追ふ小径青葉闇  
蜘蛛の囿の庇護に託す安楽寺

近詠

和田 照海

蛭吹雪

菜殻火の煙に巻きたる社務所かな  
落梅の転び競ふや波の音  
うぶすな闇蛭吹雪の青さかな  
庫裡に来て叱られてゐる青大将  
五重塔引張つてゐる蜘蛛の糸



近詠

松本 鷹根

滝しぶき

老醜を風に流して合歡の花  
茅の輪あり老身癒す神の杜  
校庭の隅に枇杷熟る孤独あり  
端居して人生論書置き帰る  
滝しぶき歳を忘れて仰ぎ見る



塩貝 朱千



蝶むすび

真白なる十三絃や瀧落つる  
夏霧の中より白波白い船  
蝶むすび風となるまで揺れて朱夏  
貴船径式部の碑守る青すすき  
美しき白蛾よ闇に夜叉となれ

英華採集

汚れちまつた春ただ揺れてたんじやう日

習志野 上野紫泉

コロナ関連の今の話題は、ワクチン接種だろうか？今年の年末までには若年層まで行き届くとのこと。もう一つはウイルスの変異株の猛威でしょうか。毎日の報道でまだまだ続く感染者の多さに掲句の「汚れちまつた春」の実感がある。毎年やってくる誕生日もさほど嬉しくも思わない作者の気持ちは理解できる。「ただ揺れて」に、まだ暫くは辛抱するしかないと思ふ素直な心情が吐露されているのではないだろうか。

黒揚羽ゆらり口紅付けぬ日々

鎌倉 平佐和子

この句も作者の内面に深く入り込んでいるのは、コロナ疫禍によるどうにもならない憤りである。外出も制限される中、化粧は勿論のこと口紅さえも付けない日々が多いのである。当然、不平不満は募り鬱憤は爆発寸前の精神状態になる。そんな時に黒揚羽が庭にやってきて悠々自適に飛び回っているのを見て蝶に対する僻みよりも蝶に自分自身を重ねて一時の現実逃避を夢想したのであろう。

薫風を丸刈り頭乗せて来る

荒尾 西村安子

五月という季節を迎えると多くの人が生活様式をがらりと変えることがある。掲句は、中学生もしくは高校生になった男の子が、野球部に入部して頭を丸刈りにしたのである。丸刈り頭は、便利なもので洗髪も手入れも時間をかけずに済ませることが出来、汗かきの若い子にはうってつけである。当然、爽やかな印象も付いてくるから「薫風」を乗せてきても違和感もない。青春には初夏がよく似合う。

日 雷 沼田 巴字

有明海めぐり走れり日雷  
迅雷や頼るものなき海の上  
壮年の雄雄しさありぬ紅蜀葵  
花莫塵にひんやりと寝る余生かな  
余生かな線香花火の散るやうな

蜥 蜴 故丸 井 巴水

噴水の昇りきれない水を受け  
青い目の魚を選ぶ五月晴  
出目金の沈みきれない応接間  
鏡が鐵かむ鉄橋の五月闇  
石となるつもりの蜥蜴猫が伏す

夏の月 植村 蘇星

奥院の古刹の風情夏の月  
一捻り言葉の綾や夏の月  
夏の月ほのと空家に静心  
七曜を確かむ独居夏の月  
夏の月自問自答の止め刺す

汗の顔 北川 孝子

汗の顔笑へぬ顔のふたつ三つ  
階下あり歌声ひびく良夜かな  
遠比叡雲むらさきに明け易し  
いささかの悔あるわかれ花もくげ  
みどり児の笑みも一会や花もくげ

見て摘んで 直江 裕子

見て摘んで最後は遠いれんげ草  
あるがまま生きて蝶の眠る場所  
すずらんの知るやコロナのしのび寄る  
穂の芽を伸びしては摘むいつか老い  
すずらんの光りのしづく恋終はる

螢 火 伊藤 希眸

梅雨はしる高層郡にさへぎられ  
市内区の早苗田ひろげ風青む  
竹皮脱ぎすすきり歩む父系かな  
瞑目す音は瀧音山深し  
螢火点滅沢のしたりと競ひあふ

表 札 高木 晶子

葉桜や始め終りを同感し  
蔵書より落つるメモ書八十八夜  
棟方の頬の紅色五月晴  
紙ふぶき作り溜めては明易し  
蔓薔薇の家表札のかくれがち

春キャベツ 奥田 筆子

ざつくりの意見に芯あり春キャベツ  
あぶな絵や夫に新玉きざませて  
時の日やワクチン接種日きまりけり  
廃屋の茗荷誰にも教えない  
一系の瓦解のあとの青大将

# 神麓集

私 雨 井上菜摘子

夾竹桃記憶に水をつぎたせり  
延長コード跨ぐ出しっぱなしの夏  
秋立つや夜明けのシェーバー音二つ  
流木は父の櫂なり天の川  
遠く来て私雨にある花野

夜の金魚 村田あを衣

夜の金魚もらす秘中の泡ひとつ  
四捨五入は苦手レモン滴らす  
振り返る術なき略 凶青嵐  
空蟬のどこまで透けば無にならむ  
サングラスはづせば見える常識論



丸山海道 第五句集 『芭蕉曼茶羅』



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

京田 山中志津子

余花残花哀史の山の夕まぐれ  
濁点のやうな野小屋や夏始め  
太平洋を釣り上げてゐる鯉舟

緊急事態宣言明けて蝶睦む

囀りを零さぬやうに日記閉づ

五歳児のジャンケン春を全うす

みらい館出て春愁を裏返す

葉桜や両手に包む子の未来

春色を脱いで蛤御門出る

みづうみに佇ち初夏の稿起こす

城陽 鷺山 珀眉

いちにちの空のはじまり花水木  
御苑の蝶自在といふも高からず  
余花白し螺鈿細工のおるこゝる

初鯉こは黒潮番外地

若葉光定食Bのナポリタン

起き伏しの禁令あまた春逝けり

鳥雲に逢魔が時の空深し

まらうどの歩みとなりぬ夕桜

白椿かくもよごして鳥翔てり

道岐れ人別れたり花は葉に

福山 亀井 福恵

溪流の水音走る余花明り

ことごと昭和の匂ひ露を煮る

夏マスクみなつけ黙に流れ行く

産声や音のはじける初鯉

雨降りてみなぎる力柿若葉

鏡には昨日のわたし衣更ふ

聞くとなく聞き出す本音古茶新茶

ちりぬるを和紙の音して夏椿

夏帽子惚れやすき性また風に

薫風や脳の中をすつかからかん

草笛や遠き日の恋草の彩

米寿とふ春化粧して化け申す

天界の老妪はいづこ桐の花

少年の孀の長さや夏来る

春移ろひつつ天と地のひと世かな

一生に三叉路もあり蝮の道

世に遠く山路辿れば余花しぐれ

永き日の退屈な貨車長く長く

青葉木菟禁裏の森の物語

花は葉にひとりの午後後の回転椅子

福知山 西村 白杉

京都 菊池 和子

高槻 安田 優歌

大阪 本郷 公子

福山 石原 孝人

髪切りて風新らしき五月かな  
ばら散るや真紅のぼらの香の中に  
ほととぎす餅で測る森の黙  
城垣の刻印石や木の芽晴れ  
余花残花名もなき山の句詠点



汚れちまつた春ただ揺れてたんじやう日

夏鶯山岳への途を迷ひたる

コロナ禍よ蛇は衣脱ぎ育ちけり

かをりまで剪りて富貴草たまはりぬ

黒揚羽ゆらり口紅付けぬ日々

母の日やパソコンフリーズしてしまっ

ポケットのつり銭ざらり街薄暑

駅前鳩寄つてくる春憂い

薫風を丸刈り頭乗せて来る

蝌蚪生れて水面の雲を走らせる

卵波立つタンク七基の三池港

まだうすき少女の胸や柿若葉

習志野 上野 紫泉

鎌倉 平佐 和子

荒尾 西村 安子